大衆文学大系

30

短篇下

監修＝大佛次郎　川口松太郎　木村毅

大衆文学大系30　短篇集・下
昭和四十八年十月二十日　第一刷
著者　丸木砂土ほか
装幀者　田中一光
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）振替東京三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　大製株式会社
定価　三四〇〇円
©秦修ほか
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

0393-136301-2253 (0)　（文2）

目次

現代小説

丸木砂土　半処女　九
沖野岩三郎　絵に禱る　三
椋鳩十　山の鮫　四
北林透馬　娼婦ロリ　五
源氏鶏太　あすも青空　七
中野實　浮かれ桜　九
野村愛正　捕虜の妻　一〇五
三角寛　山窩血笑記　一二四
乾信一郎　そろばん勘当　一三八
宇井無愁　ねずみ娘　一四八

諏訪三郎
母の乳房　一六三
サトウ・ハチロー
エンコの六　一七三
三木蒐一
春雨傘の伸公　一九七
棟田博
分隊長の手記　二〇四
大庭さち子
妻と戦争　二〇七
岩崎榮
混血児の母　二一〇
鈴木彦次郎
土俵　二三四
添田さつき
人生の奇術　二四五
堤千代
小指　二五七
今井達夫
王様　二六〇
玉川一郎
店員日記　二六五
河内仙介
軍事郵便　二九二

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

耶止説夫
海豹髭中尉　三〇七
関川周
晩年の抒情　三一五
村松駿吉
最後のトロンペット　三二九
伊地知進
将軍と参謀そして兵　三四二
木村荘十
雲南守備兵　三五一
正岡容
置土産　三六三
北町一郎
青春工場　三九五
鹿島孝二
豪傑の系図　四〇七
梶野悳三
鯨と闘う男　四一六
攝津茂和
その日のルーズヴェルト　四二七
山田克郎
帰化人部落　四三四
牧野吉晴
野人武魂　四四五

市橋一宏　男の仕事　四七七
神崎武雄　寛容　四七三
小糸のぶ　母子草　四八六

推理小説

松本泰　P丘の殺人事件　五四五
羽志主水　監獄部屋　五五九
久山秀子　浮かれている「隼」　五六三
地味井平造　煙突奇談　五八四
平林初之輔　予審調書　五七〇
山本禾太郎　窓　五九四

徳川夢聲
オベタイ・ブルブル事件　六三三
城昌幸
殺人淫楽　六三〇
渡邊温
可哀相な姉　六三五
小酒井不木
闘争　六四二
渡邊啓助
偽眼のマドンナ　六四七
濱尾四郎
殺された天一坊　六六七
葛山二郎
赤いペンキを買った女　六七七
水谷準
胡桃園の蒼白き番人　六九五
橋本五郎
鮫人の掟　七〇九
森下雨村
父よ、憂うる勿れ　七一〇
西尾正
海蛇　七一九
蘭郁二郎
蟲の囁き　七二七

大阪圭吉
三　狂　人　七九
妹尾アキ夫
深夜の音楽葬　七八〇
解　説　七七七
略　歴　七八五
守友恒
死線の花　七八六

現代小説

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

半処女

丸木砂土

道頓堀ガアル

おや、あの女は、道頓堀のカフェで、よく見た君江じゃないか。

こんな処で踊っているのを見ると、いつの間にか、東京へ出て来てダンサアになったのかな。

ダンサアになったにしては、こんな東京有数のホテルのホオルへ、しかも明治節の晩というのに、こんな処で踊っているのは、一寸辻褄の合わん話だ。

しかも踊っているのが、男じゃなくて、女じゃないか。君江よりも、年は上のようだが、生憎向う向きだから、顔は見えない。

よし、このテエブルの近くまで来たら、確に君江だかどうだか確めてみて、こっちへ来て貰おう。

こう思って僕は、この大ホオルの提灯の一杯についた下を、軽々とワルツの音に連れて、こちらへ踊ってくる、その女の顔を見詰めたのです。

その晩は、明治節の奉祝ダンスで、このホテルのホオルは、毎年の催しで、入口には、菊の花をあしらった「万歳」の額が懸かって、日の丸の旗、万国旗、提灯、いつもながらの装飾ながら、さすがに菊の季節ですから、ホオルを取り囲む小テエブルの花瓶には、大きな房々した菊の花を挿して、窓から壁へかけても、到る処、菊の花だらけなんです。菊の花の匂いというものは、妙ににがいものですが、こうして酒の匂いや、女の香水の匂いなぞの間で嗅ぐと、冷たい匂いのように感じられて、何だか鼻がかゆくなる心持がしますね。

然し好いものですよ。菊の花が真盛りの明治節。どこを見ても、菊の花の日本。……

と思っていると、段々君江の組が、僕のテエブル近くに踊って来ました。

うまく化けてやがる。あれが道頓堀のカフェ「人穴」で、酒にかけちゃ店中ナンバア・ワンという女給君江はんだとは誰も気が付くまい。そう思うと、妙に素人臭くなっていやがるな。

私はテエブルの上に置いた、コニャックの小さいコップを、取り上げて、すぐ前へ来た君江の顔を見定めました。確に間違いのない、あの女です。私はそのコップを目の高さまで挙げて、丁度君の為に祝杯を上げる、という格好をして、向うの君江の顔を見ると、正に間違いありません。君江がにっこり笑って、一寸首を下げて挨拶するじゃありませんか。

するとそれに気の付いたらしい、踊っている女が、何か一言

二言云ったと思うと、一寸振り返って、僕の方を見たのです。
「これは、唯物じゃない」
僕は思わず呟きました。横顔から斜め正面へ見た顔ですが、まず凄い美人です。
僕は目の高さまで挙げたコップから、ぐっと一息飲んだのですが、実はそのコップを確にテエブルの上へ置いたかどうか、一寸意識をしなかった位に、その顔に見とれたのですが、気が付いてみると、二三歩踊りながら進んだ処で、二人の女は何か話がついたという格好で、足をとめて、組んでいた手をほどいて、踊りの中から抜けようとしたのです。手をほどいた拍子に、その女は、君江の肩を、二つ三つぽんと叩いて、もう一度婉然たる笑顔を、君江の顔から、遙かこちらの方へまで、向けるじゃありませんか。
そこへ君江が、ハンケチを顔のあたりへ、ふらふらさせて風を入れるような形をしながら、僕のテエブルへやって来ました。目の前へ来た君江の姿を見ている内に、もう一人の女の姿は、いつの間にか、踊りの人達の中へ紛れ込んでしまいました。
「あゝ、しんど」
争われない、道頓堀ガアルです。
「旦那さん」
と言いかけて、僕のテエブルへ腰をかけましたので、僕はあわてて、
「おいおい、そんな大きな声で、大阪弁を出してくれちゃ困るよ。何処にどんな人が……」
とたしなめると、君江は、
「そうそう」
とまた思わず大きな声を出して、自分でもあわてて、ハンケチを口に当てて、笑い出しました。
「久し振だね。あんた、大阪にいるとばかり思っていたら、いつの間にか、東京まで延しているね。相変らず凄い事だろう。東京で何をしているんだね」
「ほんに永いこと。わたしね」
と今度は、まだすっかり抜け切れない大阪弁を気を付けながら、
「いつまでもあんな処で、お酒ばかり飲まして貰うて、カフェ勤めばかりしてもあかん思うて、この春から東京へ出ましてん」
「へえ感心に、心を入れ変えた訳だね。東京へ来て、何をしてるんだ」
「堅気です」
「堅気だす」
「堅気やなんて、こないな処でダンスやってるさかい」
と僕も、つい大阪同志の懐さで、あちらの言葉が出て、
「あんまり堅気でもないやないか。好い旦那さんでも出けたんやろ」
「相変らず、ヨタな事を……まだそんな一人もおまへん」
「そんなら何してんや」
「美容術やってまんね」
「美容術やて、あの、顔やマニキュアかい……へえ、豪いもんになったなあ。何処や、銀座か」
「へえ」
「豪いやっちゃなあ。道頓堀のカフェの女給さんが、足い洗って銀座で美容術をやっているのか。さすが君江さんや。女給の模範や。男が行ってもええか。僕も一度マニキュアとかいうものをやって貰う」
というと君江は、ふゝゝと笑い出して、

「男さんのくる処じゃおまへんわ。わたし、まだ弟子やよって
ん。先生の助手や」
「あゝ、そうか。まだ店を持ってへんのか。まあえゝ、いつま
でも女給なんかしてちゃあかん。思い切って東京へ出て、腕一
本で地道に稼いで、早う好え旦那はんを見つけてなあ、結婚す
るが好えぜ……まあ一杯久し振で飲も」
　僕は合図をして、もう一杯酒を持ってこさせましたが、こん
な大阪を離れた土地で、随分暴れたあのカフェの女に逢うとい
う事は、中々面白い気持のもので、互に助け合いたい気が、い
つの間にか湧いてくるのも、他国の土地だけに自然でしょう。
然し僕には、まだ気がかりが一つあるのは、例の君江と一緒に
踊っていた女です。それを訊こうと思うと、
「旦那はんは、いつ東京へ来やはりました」
　と君江が言うのです。
「僕は、毎月初めにゃ、東京へくるんだ。店の支店がこっちに
あるよって」
　実は僕の父のやっている大阪の本店から、毎月一度ずつ東京
の支店を、監督旁ゝ見廻るのは、僕の役目になっているのです
が、ほんの二三日の滞在ですから、日本風の旅館も面倒で、い
つもこの日比谷公園近くのホテルへ泊る事にしているのです。
帳場の者とも、ボオイとも馴染になって、いつも空いている限
り同じ部屋をとってくれて、相当顔が利く定連の一人になって
いるのです。
　僕がこのホテルに泊っていて、今日の祭日は、まだ明日の用
事がある為に帰れないで、丁度日米野球戦があったので、昼間
はこれを見物して、かえりに銀座へ廻って夕食を済まし、ホテ
ルへ帰ってみるとこの奉祝ダンスが、食堂のホオルで九時から
開かれているものですから、大阪仕込のダンスながら、相手が
あったら、という自信で、中へ入って空いていたテエブルへ
坐った僕なのです。
　丁度天井の真中にある、綺麗な玻璃玉の廻転が止んで、二階
のバンドが終り、中には立ち上って、催促の手を拍つ人もあり
ましたが、バンドは続ける様子もないので、踊っていた人達
は、夫々テエブルへ戻りました。あっちこっちで、シャンパン
を抜く、威勢の好い音が聞えました。
　僕がテエブルの上に置いてあった煙草の筥を、知らずに肘で
床へ落したのを、軀をかゞめて拾おうとする様子に、奥まっ
た、壁の曲った隅にあるテエブルの下へ思わず目がゆくと、テ
エブルの下では、男の足と女の足とが、仲好く組んでいるのを
見付けた位に、もうホテルの中は、陽気になっていたのです。
　僕は、目の前の菊の花へ、鼻が触れる位に、君江の方へ、顔
を近付けて、
「……あの、さっきあんたが一緒に踊っとった女。あれ何や」
　というと、君江は、また初まったという顔に、些か不安を浮
べた調子で、
「あのお嬢さん、お店のお客さんや」
「あんなんでお嬢さんか。なんで、あんたと一緒に、ここへ来
て踊ってんのや」
「あの方、店へ一週間に一度はきっと来やはる、大事なお客さ
んだすわ。うちと一番仲よしになって、今晩ここにダンスがあ
るというたら、ぜひ踊りにいこうと、わたしを誘って下はりま
した……別嬪だすやろ。でもまだ処女や。うち保証しまっせ」
「あんたに保証して貰うたって、何になるのや。処女なもんか
いな、あんなフラッパアが」
「フラッパアって、何や。保証します。ほんまにあの人、処女
や」

「処女やあるかいな。今頃こんな処に、踊りに来ている女に」
「失礼な」
と君江は、可愛く笑って、一寸考えるようにしていましたが、
「そんなら、半分位処女や、あの人」
「半分だけ処女か。半処女か。そうか。お前はどうや。処女か、半処女か」
「阿呆らしい」
「お嬢さんとは嘘だろ、本間に。気になるなあ」
「本間だす。青山の方で、やはり実業家のお嬢さんだすわ。女はんでも、何かなし気が引かれるような顔だすわ。あゝいうのが、本間のイットっていうのだすやろ。でもほんまに処女や」
僕は君江の言葉を聞きながら、ホオルの何処かのテエブルにいるんだろうと、頻りに見廻しているとどうも目に入りません。
「旦那さん」
と君江が呼ぶので、その方を見ると、例によってとろけるような目付で、
「旦那さん、一人でお泊り？」
「一人だよ。僕だって女房はなし」
と僕は東京言葉になる程もう落着いてきました。
「初まった。お部屋、何番？」
「六十九番だよ、二階の」
「押しかけて行っても、構へんかいな？」
「来てもいいが、ホテルはやかましいし、第一あんたのお連れの、あのお嬢さんは、どうしておくね」
「あちら、かめしめへん」
どうしてと訊いても、君江は笑って答えないのです。

その内に又ダンスが初まり、あるテエブルから、踊っている連中目がけて、たった一本だけテエプが飛んで、どっと笑う声も起りましたが、その間に大分酔ったらしい君江は、もう僕のテエブルに取り付いたまゝ、どうしても離れないで、僕の部屋を見せてくれというのです。
二階のボオイは、十分鼻薬は利いているし、部屋へくる事は大丈夫ですが、そんな位なら、いっそ君江が処女だと力説した、あのお嬢さんも一緒の方がいいなとも思って、ホオルの踊りの賑いを後にしてあの女に心残りもあるのですが、まあ部屋へ戻ってから、よく訊いてもみようと思って、君江とは順序を決め、僕が部屋に入ったら、二階の廊下へ現れて、何気なく僕の部屋へこいと手筈を決めました。
「あんた、大丈夫かい、大分もうお酒が利いてるんじゃないか」
「大丈夫、『人穴』の君江さんや……」
と帯をぽんと叩くのです。
僕達は一緒に席を立って、後髪をひかれる心持で、ホオルを出て玄関の広間から、中庭の間の廊下を通り、二階へ出ました。あの妙な茶色のタイルの間に、処々光る金色のメジも、大分と色が褪せましたが、壁の間から、方々に菊の花が顔を出して、曲り角から思わずぷんと、あの苦い花の匂いがしました。二階には、このお目出たい夜のことで、御婚礼の披露もあったようでしたが、もう十時過ぎの事で、跡を片付ける白服のボオイがいるだけで、僕はそこから薄暗い部屋の廊下へ曲り、自分の部屋へ入る拍子に振り返えると、あの煉瓦の角から、ちらと白い君江の顔が、こっちを覗いているのが見えました。やがてほこほこという、あのホテル独特の、廊下のリノリウムを歩く、フェルト草履の足音が聞え、かちりとハンドルを廻す音が耳に

入りました。

ピジャマと拳闘

君江は、大分酔って足許がふらふらしているのです。
「あんた、えゝのか。あんたの好え人に、怒鳴り込まれたら、僕は困るよ」
「旦那さん、あたし、そんな野暮やおまへん。『人穴』で鳴らした君江さんやがなあ」
「又初まったね。まあえゝ……さあ、ずっとお入り、ここが僕の部屋や」
「旦那さん、ここで何してんね」
実は僕もその間に部屋に置いてあったウイスキーを少しやり過ぎたせいか、大分好い心持になって、先刻の女の事は、茫として忘れてしまって、それよりも目の前にいる、この豊満な道頓堀ガアル君江さんの心持張ったような、帯から腹へかけての恰好の方が、気に入ってしまったのです。
部屋へ入ってきた君江は、もううっとりするような、色っぽい酔眼で僕を見るじゃありませんか。僕は君江の右手を執って、恭しくその手の甲へ接吻したものです。尤もこれも映画で覚えた仕草なんですが。
そうすると君江は、にこりと笑って、
「おや、それじゃ宛名が違やしませんの」
と妙に誘惑的な東京弁で言うのです。
僕は咄嗟に、その君江の手を引こうとしました。
するとどうでしょう。その途端に今迄ふら〳〵していた君江は、ぱっと身を翻して、僕の傍から二歩ばかり飛びのくと、いきなり両手を、拳闘の形に構えるじゃありませんか、僕は驚いて、
「おいおい、冗談じゃないよ。何だい、その恰好は」
「ボクシングや」
「ボクシングは分っているが、お前さんにそんな事出来るのかい。そうして僕を突こうっていうのかね」
「出来るのかは、御挨拶ね……わたし、これでも東京婦人拳闘倶楽部の会員よ」
「なんだ、僕の部屋まで遊びにくるというのだから、せめて……」
「いやな旦那さん……いやしくも東京婦人拳闘倶楽部の会員は、近寄る男子に無礼の様子が見えれば、忽ちどんと急所を突く身構えをする心得が出来ていますの。東京の処女は、みんな稽古していますから旦那さんもお気をお付けにならんと、いけませんわ」
「へえ、えらい事になったなあ。だが僕は君に対して、別に無礼な振舞をした訳でもないが」
「さあ、それがいつもの癖でなあ、矢っ張り習った通りが出ますの」
「カフェの女給さんなんかも習っているのかね」
「心掛けの好い人は、みんな一通り習っていますの。昔の肘鉄砲なんかも、今は新しい型になっていますわ」
「冗談じゃないよ。肘鉄砲とボクシングを一緒にされて堪るかい。それじゃうかうか手が出せないね」
「昔の処女と違います。旦那さん」
こう言った君江は、ふんと気取ったように澄まして、首を反らして腮を突き出して、僕を見るのです。けれども僕は、決して君江が、僕の意に反して、拒んだのではない事を、その流し目に溢れる色っぽさと、口許に結び切れない微笑に見てとったのです。あゝ構えたのは君江の言う通り、いつもの癖が出たの

でしょう。やはり可愛い道頓堀ガアルです。僕はこわごわ遠い物へ手を延ばすような恰好で、もう一度君江の手を執ろうとしました。するとその瞬間です。先刻から何かごとごと音がしているようでしたが、この時急に、どしん、と僕の部屋の壁に物がぶつかる音がするのです。僕達は勿論びっくりして、顔を見合わせました。暫く耳を澄ましていると、又ごとごとという音になったので、僕は君江に向って、

「飛んだ邪魔ものだ」

「ほんまに」

そう言って二人でにこりと笑うと、どうでしょう、又どしん、どしんと今度は続けざまに、三四回壁に軀でもぶつかるような物音です。殊に僕の部屋の間には、共通して使う場合の風呂があって、そこが通り道になる扉(ドア)があります。勿論中からかかる鍵があるのですが、それに直接ぶつかった時は、その扉がそり返りゃしないかと思う位に何か叩きつけられた様子です。

君江は澄ましこんで、

「はゝあ、お隣りさんも、きっとボクシングや」

と言うじゃありませんか。

僕は呆気にとられて、どうも油断ならぬ東京になったものだ、この位なら早く大阪へ帰った方がいい、うかうか東京の娘さんに話でもしかけると、命が危い、困った世の中になったなあと思って、君江の顔を情なくしみじみ見直すと、そこへもう一つどしんという音が聞えたと一緒に、その間の扉がかたんと開いて、頭の髪が滅茶々々になって、それが額へ垂れ下った、いやに長い男の顔が、力の抜けたぐったりとした恰好で、扉の間から、こっちを覗き込んだじゃありませんか。両手でハンドルを抑えていたので、扉は半分しか開きませんでしたが、こっちに人がいるのを恨めしそうに見ると、あわてゝ扉をぐっと締めて引込みました。

そうすると今度は、寝台(ベッド)の枕許にある卓上電話が、ちりちりと鳴るじゃありませんか。

僕はもう半分自暴になって、君江の軀を少し突き飛ばし気味に側(かたわら)へ押しのけて、その電話の受話器を手に執りました。

「もしもし、どなた？」

「へえ、恐れ入りますが、こちら、下の帳場でございますが」

「あゝ、僕だ、僕だ。何、用事は？」

「実はその、何かあなた様のお部屋で、色々音がして騒がしいという苦情(クレイム)が、お隣りの外人の部屋から唯今帳場へ文句を言って参りましたもんで」

「君、君、それは僕の部屋じゃないよ。それは隣りだよ。お隣りの部屋だよ」

「へえ、そのお隣りの部屋から、唯今文句が出ましたので」

「その隣りというのは、僕も文句を言いたい処なんだよ。その外人というのは向う隣りだろう」

「左様でございますか。何分外人はやかましいもんで」

「だからさ、君は電話の懸け先が違っているんだよ」

僕も少し向っ腹を立てて、その儘電話を切ってしまいました。こうなると愈ゝ気が落着きません。

そこへ廊下へどしどしと、荒い靴の足音がするのです。あすこのホテルの大欠点は、天井が低くて、陰気だというよりは、あれだけの近代的大ホテルでありながら、廊下の足音が、部屋の中まで聞えてくる事です。その足音は、僕の部屋の前へ来て止って、扉をどんどん叩くじゃありませんか。

僕はあわてて、扉を少し開けました。君江も大いにあわてて、洋服箪笥の蔭へうまく隠れました。

扉を開けてみると、そこには帳場の顔馴染の支配人(マネイジャア)と下の請(せい)

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com